

第1回学校運営協議会 議事録

実施日：令和6年5月17日（金）

時 間：15：00～16：50

場 所：六郷高等学校 会議室他

1 全体会 I 15:00～15:20（20分）

(1) 開会

(2) 委員委嘱

（敬称略）

佐藤 良一	六郷高校同窓会会長（地域代表）	
栗林 守	美郷町教育委員会教育長	※欠席
後藤 智之	教育振興会会長（外郭団体代表）	※欠席
熊谷 尚輝	P T A会長（保護者代表）	
西鳥羽 裕	美郷中学校校長（地元中学校代表）	
檜森 吉裕	美郷町商工会会長（地域代表）	
小松 勉	地元町内会代表（地域代表）	
鈴木 正洋	地元メディア「美郷の話題」代表	
長谷川幸子	美郷町議会議員・議会広報常任委員会委員長	
藤岡 誠人	町活性化団体（地元N P O団体代表）	※欠席
西村美智恵	前P T A会長	
高橋 郷	福祉施設経営者	
梶原恵美子	美郷町地域おこし協力隊	※15:30～参加
伊藤 哲	校長	

(3) 前会長挨拶（佐藤委員）

コミュニティ・スクールも今年で6年目になる。今月のはじめに校長と美郷町と協議したことがあるのでそのことを報告する。『首都圏から田舎の学校に行かないか』といった『地域未来留学制度』というものがある。費用もかかり、住む場所も必要であるが、全国的に800人が地方の高校で学んでいる実績のある制度である。美郷町とこのことについて話し合った。美郷町からは前向きな考えをいただいたが、県立学校に町として補助をする理由をしっかりとしたいという考えであった。今後、学校とも検討していきたい。本日は忌憚のない意見をお願いしたい。

(4) 会長、副会長の選出

（鎌田 総務副主任）事務局案として、昨年同様、会長を佐藤良一 委員（同窓会長）、副会長を栗林 守 委員（美郷町教育委員会教育長）をお願いしたい。

『事務局案を承認』

(5) 学校運営方針の説明、承認 (資料を基に、校長が説明)

(校長) 新入生43名、全校生徒141名でスタートした。少子化の影響、産業構造の変化の中、目指す生徒像を大切にしながら、新しい変化を取り入れていかなければならない。職員間の連携を高め、組織力を高めていきたい。生徒に平等で、公平な質の高い教育を提供していきたい。誰一人取り残すことなく、個々の生徒の資質・能力を育成するための個別最適な学びと、社会とつながる協働的な学びを実現することが学校運営の方針である。

具体的な取組としては、基本的な生活習慣の確立、中でも遅刻者ゼロを目指しSHRを8:30開始とし、その後に朝学習の時間を設けた。これにより、遅刻者が減っている。昨年の2回目の学校運営協議会では、生徒から「授業が簡単」という意見が出された。基礎学力の定着も課題であるため、昨年の3回目の協議会で承認されたeラーニングを導入し、学校全体で組織的に取り組むために委員会を立ち上げ全校での学びなおしをスタートさせた。成績上位者については、eラーニングは大学進学にも対応できるものなので、生徒の主体性を育みながら系統的、組織的に指導していきたい。

生徒支援については、1~2か月ごとに困りごと・いじめアンケートを行い、その結果をもとに支援が必要な生徒に対する各職員による観察をきめ細かく行っている。生徒の様子や変化をデータで一元管理し全職員で共有している。医療機関との連携もスムーズになった。

生徒や保護者からの相談は、どのような小さなものでも全て管理職への報告を徹底し、組織として対応している。学年によって対応に差があると、生徒や保護者から不平不満が出る。全ての生徒に同じ指導と支援をするようにしている。

部活動に加入する生徒が年々減っている。活動の場を創出するために、学校行事の充実に努めている。六高プロジェクトもその一つで、様々な活動を計画している。

この3月に本校の来年度の定員減、学級減(普通科1クラス40名、福祉科35名)の案が県教育委員会から発表された(7月に決定)。現在、2クラスでの新しい教育課程の編成を始めている。新しい教育課程は、魅力ある学校づくりに繋がるチャンスであると捉えている。入学者の減少については、今年度の県南地区の全日制高校への入学者数は1617名で、前年度より123名減っている。ほとんどの学校で新入生が前年度よりも減少したが、本校は前年度よりも少し増えた。40人入学という数字が生き残りをかけた大切な数値であるように感じる。一度減ると加速度的に減っていくことが予想される。外部に向けた情報発信も大事だが、それ以上に、在校生の満足度を向上させることが生徒募集につながると考えている。大学進学希望者の進路実現の体制づくりも進めたい。学校の評価は職員に対する評価として捉え、全ての生徒が活躍できるよう、教育活動の充実に取り組んで行く。

(芦原 総務主任)

配付資料は、卒業生の進路状況、六高プロジェクトの説明、学校経営計画、中期ビジョンである。異論が無ければ、学校運営方針について承認いただきたい。

『学校運営方針を承認』

(6) 年間計画の説明

(鎌田 総務副主任) 資料の4ページのとおり、11月19日に第2回、来年2月21

日に第3回学校運営協議会を予定している。

2 分科会 15:25～16:25 (60分)

- 第1テーマ「体験的な学びについて」 於：会議室
第2テーマ「個に応じた学びについて」 於：視聴覚室前方
第3テーマ「大学等の進路希望の実現について」 於：視聴覚室後方

◆第1分科会

テーマ：体験的な学びについて

委員：佐藤良一、西鳥羽裕、梶原恵美子、伊藤哲

ファシリテーター：佐藤しずか 記録：栗津奈々

(ファシリテーター)

本校は、各種ボランティア活動や夜市、天筆作成などの祭典参加、農業体験、プログラミング教室、シイタケ栽培などといった体験的な学びを行っている。これらの体験的な学びの成果と課題や事業の充実に向けた意見をいただきたい。

(佐藤委員)

今年、高卒者を一人雇用した。大卒者と高卒者との差は大人と話す力、コミュニケーション能力の差だと感じる。社会に出て即戦力として活躍することを考えると、大人と関わって活動する機会が大切である。自分の意思を伝えられないと、気持ちをためこんでしまうことになる。大人と話す機会を増やすことが大切ではないか。

(伊藤委員)

シイタケプロジェクトでは、昨年度、育てたシイタケを福祉施設や子ども食堂に提供する取組を行った。関わった生徒たちは、明らかに会話する力が向上したと感じた。今年度の1回目の栽培は、希望する1年生9名が参加し活動している。栽培したシイタケは、担当する生徒が自宅周辺の家を訪ねて説明した上でお渡ししている。大人と話すことでコミュニケーション能力が高まると思う。

(佐藤委員)

福祉科についてだが、施設実習を経験した生徒と、そうでない生徒に違いはあるか。

(ファシリテーター)

実習を経験した生徒たちは、相手の表情を見て会話をすることができるようになり、話題を見つけてコミュニケーションが取れるようになっている。介護の現場での経験がコミュニケーション力を大きく成長させていることを実感する。保護者や教員ではない大人と話す機会は重要だと感じる。

(佐藤委員)

中学生ともなれば、大人と気軽にコミュニケーションが取れるのではないか。

(西鳥羽委員)

生徒同士のコミュニケーションにサポートが必要な生徒もいる。新入生はもちろんだが、2年生でもコミュニケーション教室を行いクラスに溶け込めるように配慮している。

中にはクラスに入っているだけで、不安を感じてしまう生徒もいる。話せる生徒と話せない生徒との差が大きい。コミュニケーションに支援を必要とする生徒もいる。

地元の方から、中学生から「こんにちは」と挨拶されたという感謝のメールが届いた。1人の生徒の行動が地域貢献につながり、またその生徒が自信や誇りをもつきっかけとなる。自らの行動で喜んでくれる人がいることや、人の役に立っていることを実感させることで、自己有用感をもたせることも大切だと感じる。

(伊藤委員)

自信をもたせる様々なきっかけを作り、個々の生徒にどう与えるかが大切だ。

(梶原委員)

生徒が成長するきっかけづくりという視点で、これまでの教職経験をふまえて、お話しする。係や委員会などの自分の役割を果たし、自分たちの力で学校行事を行っていくなどの学校生活を通して、生徒は力を発揮し大きな変化を遂げると感じる。学校の中でのコミュニケーションは比較的安心して行っているので、学校での様々な出来事で良いところを見つけて褒めて伸ばしていければと思う。外部の方とのコミュニケーションはなかなか難しいが、部活動の力は大きいと感じる。インターンシップでは、限られた指導時間ではあったが、「時間・身だしなみ・挨拶」の3つはしっかり指導して取り寄せた。インターンシップの取組は進路決定率を高めることにつながり有効であったと思う。

(西鳥羽委員)

部活動は精神力を高め、耐える力や生きていくための力を育てる意味で重要だと感じている。注意されることに慣れていない生徒もいるが、社会に出た時のことを考えると耐える力も必要だと思う。

(伊藤委員)

来年度の定員減に関してだが、入学者を増やすための取組として在籍している生徒たちの満足度を上げていくことが大切だと考え昨年度から取り組んでいる。入学してくる生徒の中には不登校を経験した生徒もいる。また本校は就職希望者が多い。社会に出る最後の砦として社会性を育み、また学び直しの機会をつくることも大切だと考えている。

(西鳥羽委員)

昨年度の学校運営協議会で、「勉強が簡単すぎる」という生徒の声があった。大人の前でそのような意見をしっかりと言えることは素晴らしいと感じた。またその意見を受けて、今年度eラーニングを導入するなど生徒の声に応えた取組を行っている。

(ファシリテーター)

体験的な学びの中から生徒は自己有用感を高め、新たな学びに繋げていくことと、そのためには、生徒の成長を促す様々なきっかけを作っていくことが大切であるということが見えてきた。

◆第2分科会

テーマ：個に応じた学びについて

委員：熊谷尚輝、鈴木正洋、高橋 郷

ファシリテーター：鎌田裕太 記録：菅 徹

(ファシリテーター)

来年度からの教育課程をどうするのか、急ピッチで検討している。新しい学校を作るというイメージで忌憚のない意見をお願いします。本校には、義務教育段階の学びが定着していない生徒も在籍している。進路で苦勞することがある。一方で授業が簡単という

意も見ある。今年度、eラーニングを導入し、試行錯誤をしながらその活用法を検討している。生徒の主体性、自主性を育むにはどうすればよいか意見をいただきたい。テーマから外れてもかまわないので、様々な意見をいただきたい。

(熊谷委員)

タブレット購入は経済的に厳しい家庭も多いのではないかと。根付かせていく工夫や、PTAから補助していくなどの仕組みも必要だろう。購入をさせる予定であれば費用面について検討が必要である。

スマートフォンは、ほとんどの生徒が持っている。通信料の問題は、公共の施設の無料Wi-Fiを使って、通信料を気にせず全員がタブレットを使い、場所を選ばず学び直しができるのではないかと。

(鈴木委員)

昨年の協議会で高校の普通科改革について話があったが、普通科に特色を持たせてはどうか。普通科という名前ではなく、学習の内容が分かるような学科名にするなど、特色のある高校にすることで、首都圏からの高校生が入学した際、生き生きと過ごすことができるのではないかと。

自転車競技部、福祉科は特徴の一つである。地域の伝統文化もある。首都圏では学べないことなど特徴を打ち出せばよいのではないかと。3次産業、サービス、商業を盛り込むなど普通科にもっと特徴をもたせてはどうか。

(熊谷委員)

活躍の場を与える。「リスタート」という生徒募集をしてみるのもいいと思う。自分で自分のやることを選べる学習形態にし、それを教員がサポートしてはどうか。

(鈴木委員)

eラーニングを使って、生徒の希望を叶えられる総合学科にできないか。

(高橋委員)

自分の素質を発見するような場を作る。例えば文化祭で絵を描く機会を与えれば、自分の特技に気が付くことができるかもしれない。生徒の可能性を伸ばすことができる学校であればいいのではないかと。生徒は親の仕事しか知らないこともある。いろんな仕事の卒業生に來校してもらい話をしてもらってはいかがか。福祉や看護を目指す人は特に伸ばしてほしい。自分が何が得意かを気づかせてやることが大事と感じる。

私は六郷高校の未来を考える会から関わってきたが、今年度は分科会も具体的に良くなったと思った。

(鈴木委員)

個に応じた学びができる総合学科のような六郷高校を提案する。

(熊谷委員)

学校独自に科目を作ることはできるのであれば、自分が学びたいことを学べる科目を作ってみてはどうだろうか。しいたけの栽培経験や夜市等の祭典への参加も大事である。参加する際、企画から携わることで企画力がつくと思う。「企画から実践まで」ができる学校であれば、しいたけ販売等を通し、経験値をアップさせることができる。この地域で実践できることは、他の地域にない特徴である。

(鈴木委員)

ボランティアで福祉施設の花壇への定植をするとき、用意された花を植える労働力と

してのボランティアではなく、「どのような花がいいか？」と聞くところから始めれば企画に携わることができ、理想的なボランティアになる。企画から参加することで、主体性がつくのではないか。夜市で企画に関わり六高生が活躍できるようになればよい。

生徒の一番の興味は情報分野である。良質な雇用がないと若者がどんどん県外に出て行くという新聞記事を見たことがあるが、こういった情報分野やIT関連の職種が今の時代に合う良質な雇用になるのではないか。

(高橋委員)

YouTubeなどから多くの知識を得たり、興味が湧いてくる場合もある。映像の仕事をしてみたいという人も生まれてくる。

(熊谷委員)

きっかけを作ってあげることで幅も広がる。大曲農業高校の卒業生で、農業はやめたという人もいるが、始めた人もいる。ユーチューバーになるには何をすれば良いか。ラーメン屋になるには何をすれば良いかなどを考え、多種多様な仕事に就けるようになれば、それは六郷高校の魅力になる。

(熊谷委員)

自分の好きなことは、子供たちも頑張るはず。週2時間ぐらいは「好きなことやってごらん」と、生徒に預けて考えさせることで可能性が広がる。「自分たちのやりたいことやれるよ。」「やりたいことを家でばかりやらなくても、学校が後押ししてくれるよ。」という声生まれるのではないか。

学校で作れる科目(学校設定科目)は、大きな魅力に育てていける。

(鈴木委員)

アルバイトは一つの大きな経験である。地域には、同好会、歴史同好会、学校の先生、PCが得意な人もいる。パソコン同好会やビジネス系の資格同好会もある。こういった地域の人に協力してもらい、六高生が同好会などに参加することで活性化につながるのではないか。

◆第3分科会

テーマ：大学等の進路希望の実現について

委員：小松勉、檜森吉裕、長谷川幸子、西村美智恵

ファシリテーター：伊藤 公介 記録：石川 昇

(檜森委員)

過去には国公立大へ入学した優秀な生徒がいた。

(西村委員)

現在、本校に大学進学イメージはない。勉強が苦手だから六郷高校に進学するという中学生もいる。

(檜森委員)

大学進学希望が数人でもいるのであれば、1年生のうちから特進クラスなど進学者向けの対策をしてみてもどうか。国公立大学であれば進学費用を低く抑えられる。

(長谷川委員)

入学時、大学進学の希望がない生徒でも希望が変わって大学進学を考える生徒がいる

かもしれないので働きかけをしてみてはどうか。中学で学力が伸びなかったが、高校で伸びることがある。いつ伸びるかはわからない。高校に入ってから大学を目指すことができることを教える。1つの教科が特化して伸びることもある。

(檜森委員)

大学進学の特長、大学生活の楽しさ、大学での交友関係の広がりなどを教えてみる。保護者が大学に行ったことがなければ子どもに大学の良さを教えられない。教員側から教えてやって欲しい。経済学部など、特定の資格を得る大学以外への進学について保護者に理解させる必要がある。保護者はお金を使って何になるために大学に行くのかを考えがちである。

(西村委員)

大学進学にこだわらずに生徒の伸ばして希望をかなえさせて欲しい。

(檜森委員)

進学実績を上げ、優秀な中学生に六郷高校に入って、進学を頑張ろうと思ってもらえるようになって欲しい。生徒数減への対策になる。

秋田大学、秋田県立大学、ノースアジア大学などの見学をさせてみてはどうか。

(長谷川委員)

大学進学希望を諦めないように、大学進学してやりたいことを育んではどうか。1年生ではあまり難しい教材を選ばずに、できる体験を積み重ね、2年生で徐々にレベルを上げていき成績を伸ばして合格を目指させてはどうか。

(ファシリテーター)

既存の教科にとらわれない授業や活動を選択できる仕組みに関する意見をお願いしたい。

(小松委員・檜森委員・長谷川委員・西村委員)

- ・ダンス学科 ・調理学科 ・ウェブデザイン ・eスポーツ ・農業
- ・外国語（英語、韓国語、中国語） ・そろばん（今でもできる人は重宝されている）

3 全体会Ⅱ 16:30～16:50（20分）

(1) 各分科会からの報告

(2) 学校運営協議会副会長代理 挨拶（熊谷委員）

参加した第2分科会では、新たな学び直すと、魅力あるものを作るきっかけに地域の資源を利用するなどの案が出た。これらをつなげていくことがこれから必要だろう。子供が何ができるか、何をしたいのかを気づかせてやれる機会を作り、可能性を引き出してもらえる学校になれば、学校は絶対になくならないと思う。子供が興味をもてる学びに努めてもらえれば良いかと思う。美郷町の六郷高校だからやれたということになればいい。何かにつまづいた子たちが「きっとできるようになるよ」と思ってくれれば他地区からの生徒も集まり六郷高校は発展すると思う。